

書評

亀山郁夫著

『ゴルバチョフに会いに行く』

集英社、二〇一六年

伊藤達也



本書は題名が示す通り、著者自らが二〇一四年十二月にモスクワで行ったミカエル・ゴルバチョフへの単独インタビューを中心に、ソ連崩壊という未曾有の歴史的事件の真相、なかでも八月革命のクーデター、新連邦条約にまつわるゴルバチョフの態度の真相を解明しようとする意図のもとに企画されている。この目的のため、著者が希望したインタビュー時間は二日にわたる合計六時間。しかしゴルバチョフ側の都合でわずか一日、しかも一時間四十五分しか取材が許可されなくなってしまう。このアクシデントを受け、急遽著者は取材後の調査で不足を補う方法を採用する。幸い現役を退いたゴルバチョフは、自ら設立した財団で、世界中のジャーナリストたちを相手に、政治家としての人生やロシアの将来について語っており、各国語で公開されているインタビューの中には著者がするつもりでいた質問も含まれていた。ロシアではゴルバチョフの自伝『アフタークレムリン』（未邦訳）も出版されたばかりである。結果、本書はインタビュを軸に、著者による一九九〇年モスクワで開催されたパステルナーク生誕百年記念祭への参加記録、八月クーデターの失敗後に謎のビストル自殺をとげたボリス・ブーゴ内務大臣の評伝、ゴルバチョフによる「ベルリンの壁崩壊二十五周年記念講演」の翻訳などを加え、多角的にソ連崩壊の謎に迫ろうとする意欲作となった。

誰もが知るように、一九八九年の東西ドイツの統一は、一九八六年からベ

レストロイカを断行したゴルバチョフの功績なしには実現せず、それゆえ一九九〇年にゴルバチョフはノーベル平和賞を受賞するが、その翌年ソ連という国家はあつてなく崩壊してしまう。「熱烈なゴルバチョフ支持者」である著者はインタビュー冒頭でゴルバチョフを、ゼウスを裏切つて人類に火（文明）を与えたプロメテウスに喩え、教養ある元大統領は対話の中でこの比喩を展開してみせる。そしてプロメテウスの火の行き着くところがチエルノブイリ原発事故であるという著者の比喩の真意は、中盤以降に明らかにされることになる。緊張をはらみながらも、インタビューが対話へと幸福な変容をとげていく中で、著者は一九七四年の夏、ブレジネフ時代のソ連に初めて滞在した際の「言葉に尽くせない明るさ」を語りはじめる。期せずして聞き出すことに成功したゴルバチョフのリーダー論「リーダーは次のような人間でなければなりません。世界で起こっていることをしっかりと受け止めることのできる人。地球規模で物考えることができる人。さらにしっかりとしたヴィジョンをもっている人。」（二三八頁）、極東での日露関係の将来についての見解「一緒に暮らして、一緒に開発する。大切なのは領土を一緒に統治したり、一緒に開発することです。」（二四一頁）は現代の読者の関心を特に引くだろう。

政治家としては善良すぎたと言われるゴルバチョフは、文化人に愛され、ヴィム・ヴェンダースは、『時の翼にのって』（一九九三）にゴルバチョフを本人役で出演させ、壁崩壊後の世界を描いた。また二〇一六年現在ハリウッドでゴルバチョフの伝記映画の制作が進行しているとも聞く。今日誰もがプーチンのロシアを語ることに熱心だが、ソ連百年の歴史は二十世紀の歴史そのものでもあるのだ。欧州連合にはころびが見え始めている今日、ソ連という史上初の理念先行型国家の百年にわたる壮大な実験から得られる教訓は数知れないだろう。第七章のゴルバチョフによる「ベルリンの壁崩壊二十五周年記念講演」で、後半になるにつれ彼が愛してやまなかった「普通の人々」の熱狂と歓声にかき消え去れて行く感動的な演説を読むことは、今日なお類い希なるリーダーを求める人々の声を耳の奥に甦らせるのに十分である。